

武田信玄公生誕500年記念

塩ノ山見学会

開催日 10月21日(木)
令和3年

「しほの山さしでの磯にすむ千鳥

君がみよをば八千代とぞ鳴く」

塩ノ山は『古今和歌集』の賀歌として登場以来、差出の磯とともに宮廷歌人憧憬の地として多くの歌に詠まれています。後には、「塩山蒔絵」のような工芸品の意匠にまで発展しました。

臨済宗の大本山・向嶽寺の山号になっている塩ノ山をご案内します。

■開催時間 午前9時30分～11時30分頃 ■集合場所 旧高野家住宅バス駐車場

■定員 30名(先着) ■参加費 無料(別途保険料100円)

■行程表

旧高野家住宅バス駐車場(集合)→塩山温泉郷→塩ノ山遊歩道→向嶽寺→秋葉神社
→旧高野家住宅バス駐車場(解散)



甲州市教育委員会文化財課・甲州市観光商工課 共催

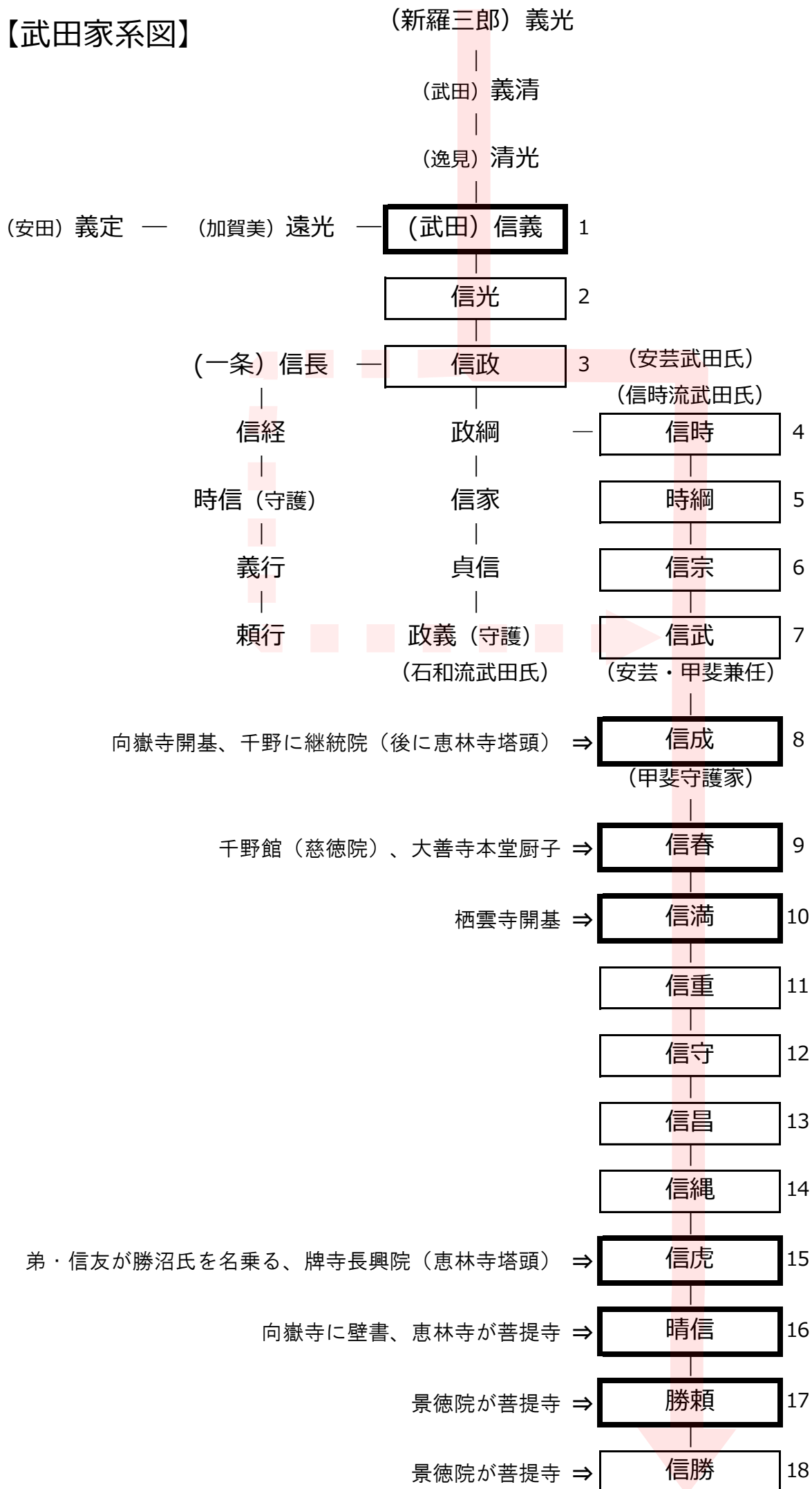
新型コロナウイルスの感染リスクを十分に配慮し、感染を防ぐための対策を講じたうえで開催します。
新型コロナウイルス感染防止のため、以下のご協力をお願いいたします。

①マスクの着用をお願いします。

②体調の悪い方の参加はご遠慮ください。

③受付の際、消毒・検温・ヘルスチェックシートへのご記入のご協力をお願いします。

【武田家系図】



武田家と甲州市

武田家が甲斐国守護として甲州市域に直接関わりを持つようになったのは**武田信成・信春**親子の代からである。南北朝時代に入り、甲斐守護職としての武田家に異変が起こる。鎌倉時代で確認できる守護職として**武田政義**がおり、本拠を石和（笛吹市石和町）に置いた（**石和流武田氏**）。政義は南朝方についていたが、石和で戦死している。一方北朝方についた**信時流武田氏**があり、**信時**は安芸の守護に任じられていたので**安芸武田氏**とも呼ばれている。信時の子**信武**は政義のあと甲斐守護職に就き、信武の子**信成**は、康暦2年（1380）**拔隊得勝**に塩山の地を与え、塩山向嶽寺（塩山上於曾・当時は向嶽庵）の開基として影響力をもった。それまで拠点として使われていた石和（笛吹市）ではなく塩山地域を拠点としたのである。

信成の子**信春**は千野の慈徳院内に館（別名「千野館」）を構えていたとされており、また、信成の館についても戒名と同じ名の**継統院**が千野にあったとされることから、信時流武田氏が市域を重要視していたことがわかる。さらに、信春の子**信満**は、天目山栖雲寺（大和町木賊）の開基であるとの寺伝がある。



■武田信春墓所（慈徳院）

信成・信春・信満の三代にわたり甲州市との縁がつながっていることは、信成以後当地が重要視されていたことを物語っており、信満の子**信重**が守護職となって以降は、向嶽寺に対し保護を加えることが武田家の正嫡の証であった。このことが、市域に著名な社寺が保存され、また、武田家滅亡後も徳川家康らによって守られてきた大きな理由である。

塩山向嶽寺

向嶽寺（塩山上於曾）は山号を塩山といい、臨済宗に14派あるうちのひとつの本山で、向嶽寺派を名乗る。境内は南北300m、東西170mと広く、北側は塩ノ山に接し、その山裾を利用して名勝指定の庭園が造られている。中心市街地の北西に位置し、塩ノ山を含む広大な境内が開発されることなく保存されている。



■向嶽寺中門（重要文化財）

向嶽寺の前身である草庵向嶽庵の開基は**武田^{のぶしげ}信成**で、開山抜隊得勝の語録に「当国主武田刑部法光塩山を寄進す」と記されている。抜隊禅師は永和4年（1378）、武蔵国から甲斐国に移住して竹森に草庵（現高森院^{こうしんいん}）を構えるが、彼に師事した宝珠寺（山梨市牧丘町^{まきおか}）の昌秀庵主に塩山への移住を勧請され、信成の寺地寄進を受けて、康暦2年（1380）に現在の地へ移った。

あきば 秋葉神社

秋葉神社は向嶽寺の境内に祀られている。向嶽寺では応永32年（1425）の火災をはじめ大小さまざまな火災が相次いだため、元文4年（1739）に静岡県^{さんじゃくぼう}の秋葉三尺坊大権現（火伏せの神）を火難消除の願いを込め勧請した。

当初の秋葉神社は塩ノ山の山頂に建てられていたが、明治時代になり山が国有地となったため向嶽寺境内に移したという。お堂の中には檜皮葺の旧社殿が安置されている。

地元の人々から「あきやさん」と親しまれている秋葉神社大祭は、毎年4月18日に行われる。



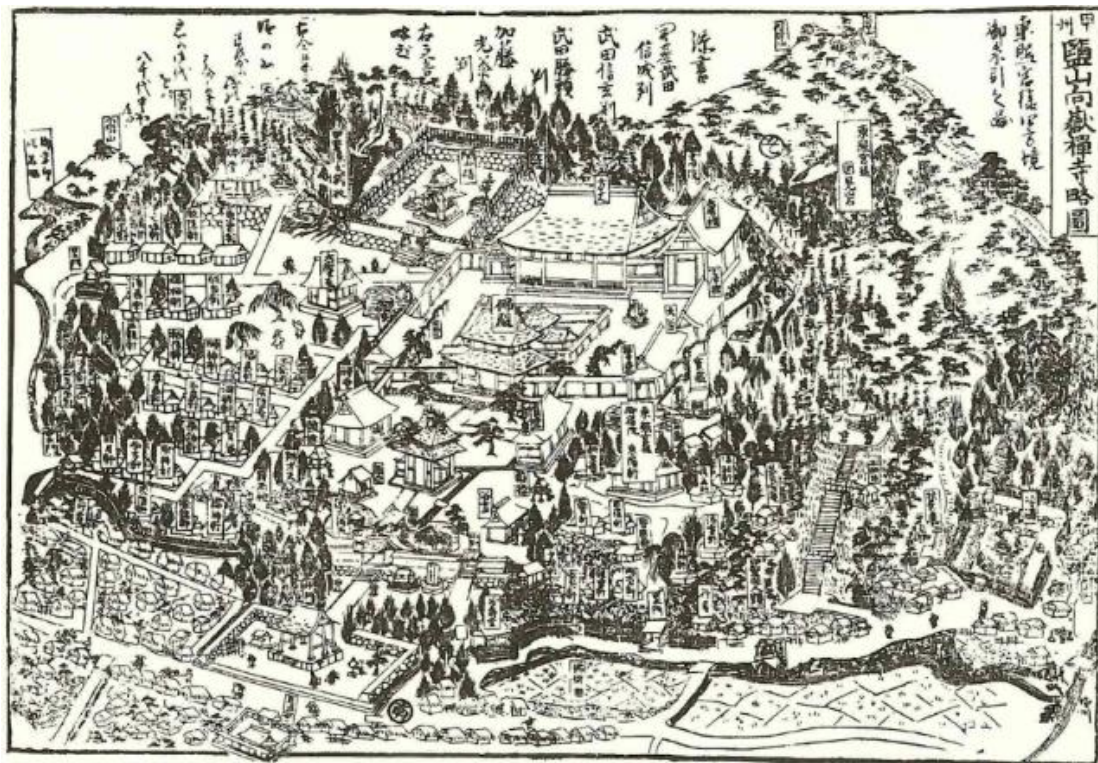
■秋葉神社大祭（あきやさん）

塩山温泉と向嶽寺

塩山温泉は塩ノ山の東麓にあり、14世紀末に向嶽寺を開山した抜隊禅師の発見と伝えられる。享保9年（1724）「上於曾村村鑑明細帳」によれば、温泉は向嶽寺の御朱印のうちにあつて、門前41軒のうち16軒が湯宿を開いていた。浴客も当時年間1万人を越え、青梅街道沿い^{おうめ}にあつたため大菩薩越えで訪れる湯治者も多かった。門前を取り仕切るのは向嶽寺で、温泉場における出来事はすべて向嶽寺に届けられて処理されていた。温泉の管理は門前百姓が請負い、また、湯宿錢も向嶽寺の許可を得て定めていた。

『甲斐国志』山川部には、「温泉、塩山ノ寺門ノ東ニテ青梅路ノ傍ニ在リ微温ナリハ九月ノ頃脾胃虚冷ノ人入浴ス又婦人無子モノ夫婦同浴スレハ則チ子アリ若シ得サレバ明年モ亦如是ス三年ヲ過ギズシテ必ズ驗アリト云」とあり、冷泉だったため浴客は夏秋に多く、江戸期を通じて薬効がある温泉として有名であった。同書向嶽寺の条にも「薬泉 一基東門ノ前ニ在リ」と記され、「薬泉」との表記から、もともとは向嶽寺が大眾のために施していたものと思われる。

明治 36 年（1903）の中央線の開通と時を同じくして、塩山温泉は向嶽寺の管理から離れ、民間で経営されるようになった。



■甲州塩山向嶽寺略図（享保年間）

季候町と塩山温泉の町並み

明治 36 年（1903）鉄道開通と塩山駅開業に伴い、駅の予定地の北に隣接した広大な私有地を、中村季候^{なかむらきこう}がいち早く市街地として開発した。現在の名称は塩山上^{きこうまち}於曾の町屋であるが、地域住民は現在でもその辺り一帯を「季候町」と呼んでいる。

季候町は鉄道を契機として形成された町の典型で、1辺 30～50mの正方形または長方形に区画し宅地とした。季候町には青梅街道北線が通り、もともと街道に沿って人家があったが、鉄道開通以降は通りの両側に短冊状に地割された商店が並び、娯楽施設は塩山駅と塩山温泉の間にある季候町と中央通りに集中した。現在でも飯島家長屋門や荒木薬局、塩山シネマなど、当時の季候町の様子を伝える建造物が残っている。

中央線の開通後の塩山温泉は、鉄道に乗って遠近の客が集まったほか、塩山駅周辺のにぎわいにより繁盛した。現在でも 6 軒の温泉旅館が営業しており、明治 36 年創業の廣友館^{こうゆうかん}と中村屋旅館は当時の面影が残る建物で営業している。

古今和歌集で歌われた「塩ノ山」

山々に囲まれた甲州市にあって、市街地の西側に孤立する山が「塩山」の地名の由来になった塩ノ山^{しおのやま}である。標高は約 554mを測り、山頂から市内を一望できる。向嶽寺の領地であり、市街地に接しながらも大きな開発がされることなく景観が保全されている。アカマツの天然林としても知られている。

名前の由来については諸説あるが、平地にポツリとあるので「四方からみえる山＝しほうのやま」からきていると云われている。さらに康暦二年（1380）抜隊得勝禅師が向嶽寺（当時は向嶽庵）を開山した際、「しほうのやま」に「塩山」の字を充て、音読みである「えんざん」を山号とした。現在、重要文化財向嶽寺中門に架かる扁額に、抜隊禅師書の「塩山」をみることができる。

この塩ノ山は古くから甲斐の歌枕として知られており、11 世紀前期頃に成立した『能因歌枕^{のういんうたまくら}』に「シホノ山」、13 世紀初頭の『八雲御抄^{やくもみしょう}』に「しほの山」等と記録されている。現在知られる塩ノ山を詠い込んだ最も古い歌は『古今和歌集』所載、「志ほの山 差出の磯に 住む千鳥 君が御代をば 八千代とぞなく」である。詠み人知らずであるが、「塩ノ山」と「差出の磯」（山梨市）の情緒は、この歌のイメージから宮廷歌人の憧れの地となり、さらに 15 世紀前半には、「塩山蒔絵硯箱^{えんざんまきえいすずりばこ}」のような工芸品の意匠にまで発展した。

輿水先生解説

塩ノ山とぶどうの丘はどのようにできたのか

塩ノ山とぶどうの丘は、甲府盆地の東部に奇妙な山(丘)として認められます。この地形のでき方については、甲府盆地を含む日本列島における地形や地質の形成史の中で理解されるものです。具体的には、“かつての南海トラフに堆積した地層”が伊豆半島の衝突などで北に移動し、さらに本州中央部の屈曲史を経て、結果的に過去の海底堆積物が甲府盆地の西～北～北東域に高標高の南アルプス・大菩薩山系等の山として形成されたわけです(図1)。

その後、これら高標高域の山地の浸食・運搬作用により、相対的に低標高の甲府盆地側に土砂運搬が活発になる過程で、甲府盆地周辺域には概して規模の大きな扇状地が形成されました。たとえば、盆地西部の御勅使川扇状地、盆地北東部の勝沼扇状地などに見られます。この扇状地形成のプロセスを、塩山・勝沼・一宮地域の地質分布として示しました(図2)。

この図2で示される青系が海底堆積物の四万十帯、オレンジ・ピンク系は四万十帯に貫入した花崗岩類です。塩山市街地と勝沼町東部の2カ所に、四万十帯(青系)が“飛び石の分布”として認識できます。この飛び石の位置には、塩山市街地の「塩ノ山」、勝沼町東部の「ぶどうの丘」があります。これらの飛び石は、今から数万年年前頃、背後に分布する青系地域の四万十帯と一体の地層として分布していました。

つまり、塩ノ山とぶどうの丘は、かつてその背後に分布する四万十帯の地質と一体であり、一体であった当時の河川は現在とは別のルートの流れたと推定できそうです(図2)。

その後の時間経過の中で、背後の土砂流出などで河川の流れが変化・発達することにより、塩ノ山とぶどうの丘が分断され、現在のように孤立分布することになった、と考えて大きな矛盾はなさそうです。

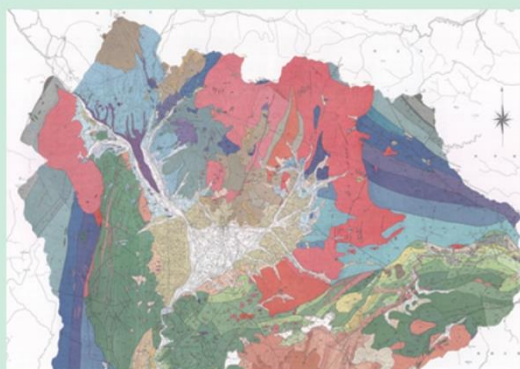


図1：山梨県の地質図
(山梨県地質図編纂委員会/1970)



図2：塩山・勝沼・一宮地域の地質分布
(山梨県地質図編纂委員会/1970)